

「江村」

報告：花岡風子

前回学んだ『蜀相』の2か月ほど後に書かれた詩とされています。杜甫は妻と幼子を持って、数千キロにも及ぶ苦難の旅^注の末、成都に辿り着きました。そこで初めて古くからの知人達に助けられ後に草堂と呼ばれる茅葺きの家に落ち着くことができました。浣花溪という溪流と錦江という川のほとりに住まいを得て、杜甫の一家が食うや食わずの生活から抜け出し、ようやく人心地ついた頃の詩です。

前半は曲がりくねった清流に抱かれるような静かな村の風景を描いています。時は夏を迎え、燕が飛び交い家々の梁に巣を作っている。川カモメが仲良く戯れているのどかな農村風景です。

後半は、妻が家で紙に将棋盤を描き、幼子は針を釣り針にしようと叩いている姿を描いています。

また、友人達が代わる代わる来ては、米を分け助けてくれる境遇を語り、最後には「このちっぽけな自分にはこれ以上何を求めるものがあるか」と結んでいます。

杜甫といえば、天下国家の礎になりたいという大きな野望を抱き、精力的に詩を書き活動してきました。しかし、仕えたいと一途に願っていた唐の玄宗皇帝が安祿山の乱で失脚し、息子の肅宗皇帝に仕えて左拾遺の職を得たものの、ソリが合わず、左遷されます。そこで飢饉に見舞われ、その後官を捨てて、甘肅省天水に移動。危険な山道を越えて命からがら蜀(今の四川省)の成都に辿り着きます。ドングリや山芋を食べながら命をつなぐ過酷な旅の末、ようやく雨露をしのげる家と飢える気遣いのない落ち着いた家庭生活を得たのです。

最後の一句を杜甫の仕官への諦めと悔しさの表れとする解釈もあるらしいです。しかし、筆舌に尽くしがたい苦勞を味わったからこそ、平和な自然の風景と家族の安堵の日々を深く身に感じ取ることができたのではないのでしょうか。そしてその安らかな日々を惜しむ詩人の優しげな眼差しが、否応なく目に浮かびます。この作品を機に杜甫の作風も変化を見せ、政治家ではなく「詩人」としての生き方を定めたよう

jiāng cūn
江 村

作者：杜甫

qīng jiāng yì qū bào cūn liú
清江一曲抱村流cháng xià jiāng cūn shì shì yōu
长夏江村事事幽zì qù zì lái liáng shàng yàn
自去自来梁上燕xiāng qīn xiāng jìn shuǐ zhōng ōu
相亲相近水中鸥lǎo qī huà zhǐ wéi qí jú
老妻画纸为棋局zhī zǐ qiāo zhēn zuò diào gōu
稚子敲针作钓钩dàn yǒu gù rén gòng lù mǐ
但有故人供禄米wēi qū cǐ wài gèng hé qiú
微躯此外更何求

にも取れます。

この後、杜甫は嚴武という先祖の代からの知り合いに工部員外郎という名目だけの役職を世話されますが、その時杜甫はもう役職につくのは嫌だと断ったそうです。ところが嚴武は半ば無理矢理杜甫をこの職に就けてしまいます。しかし、晩年少数民族が成都に乱入したことで、杜甫は再び安住の居を追われ、長旅の末、長沙で亡くなりました。

盛唐末期の戦乱の世にあって、一度も武力と関わることなく筆一本で生き抜いた杜甫。国を愛し、家族を愛した人生に地味ながら、濁りなき清々しさを感じます。

この詩は中国で今なお愛読される『唐詩三百首』にも入っておらず、さほど有名な詩ではありません。植田先生も今日の講座の前に「はて、なぜ自分はこの詩を選んだかな?」と思うほど、一見何でもないような詩だったそうです。「ところが、繰り返し読めば読むほどジンワリくるんだよね」「李白の詩は読んだ瞬間ノックアウトパンチのような強烈なインパクトがある。杜甫の詩は読んだ瞬間は平凡で、それがどうした? って感じだけど、後からジワー、ジワーッとくる。李白がパンチなら、杜甫はボディーブローか

なあ〜」とのコメントに一同深く頷きました。

この後、この詩の構成についても詳しくお話がありました。この詩は律詩です。律詩、絶句は偶数句の最後の一字に韻を踏む決まりです。七言律詩(絶句)の場合は最初の一句も押韻します。この詩は流、幽、鷗、鈎、求の5箇所を平声(第1、2声)で押韻しています。

この場合、韻を踏んでいない奇数句の末尾は仄声(第3声、4声)にする決まりですが、これも「燕」、「局」、「米」とキチンと仄声で決めています。「局」は現代中国語では2声の平声ですが、古代音では仄声になります。また、律詩や絶句など限られた字数の詩では繰り返し同じ字を用いることを避けるのが一般的ですが、杜甫はこの詩で重ね字を多用しています。

一句目で「江」と「村」、二句目で「江村」と「事事」、三句目で「相親相近」と、重ね字を多用し、民謡のような独特のリズム感を出しています。植田先生曰く「重ね字は律詩や絶句では言わば禁じ手。多用しすぎると俗っぽくなる。リズムの良さと俗っぽさのすれすれ」「前半四句で散々重ね字を使っておいて、後半は、重ね字をやめ、グッと締めている、この対比も面白い」と。

杜甫の凄さは、詩の基本法則をキチンと守りながらも独特のリズム感を出しているところ。あたかも自由に書いているように見せながら、基本は外しません。また、全56文字という限られた字数の中で、自然の風景の静けさと心中の穏やかさ、「燕」と「鷗」の伸びやかな暮らしぶり、「人」の睦まじい家族生活、家族の愛情と友の友情、という風に連想が重ねられていっています。

巢に餌を運ぶ燕からは子育ての姿を、川面を仲良く泳ぐカモメの姿は夫婦愛を彷彿させます。読めば読むほど、計算し尽くされたような詩の構成と一幅の絵のような魅力を感じました。

「古典の良いところは、自分の変化について来てくれることだね〜。2、30代に読んだときは『何だこりゃ』としか思えなかった詩が50代に読むと『なかなかいいね〜』と思え、70代になると『すっごくいいなあ』と変わっていく」植田先生の言葉に頷きながら、参加メンバーそれぞれが人生を振り返り、杜甫の人生の転機とも言えるこの詩に想い

を馳せました。

詩の背景を伺った後は、いつも通り中国語での音読練習。先生について句ごとに分けて読むことから始め、参加者全員の詩の朗唱の音が重なります。中国語の言語で音読するからこそ押韻やリズム感の魅力を味わうことが出来る、今回もそんな贅沢な時間を堪能しました。

最後の雑談タイムに講座参加の田井さんから、杜甫のこの詩はイギリスの詩人、ロバート・ブラウニング(1812 ~ 1889)の『春の朝(1841年作)』を彷彿させる、との感想がありました。とても有名な詩だそうです。なんでもない朝が特別に見える。世界広し、と言えども人の幸せの本質はここにあるのかもしれない…。

Pippa's Song Robert Browning

THE year's at the spring,
And day's at the morn;
Morning's at seven;
The hill-side's dew-pearl'd;
The lark's on the wing;
The snail's on the thorn;
God's in His heaven--
All's right with the world!

春の朝 上田敏 訳

時は春、
日は朝、
朝は七時、
片岡に露みちて、
揚雲雀なのりいで、
蝸牛枝に這ひ、
神、そらに知ろしめす。
すべて世は事も無し。

注)：玄宗皇帝の死後、長安で玄宗皇帝の息子・肅宗に仕えたが、ソリが合わず華州(陝西省)に左遷された。その後、官を捨て家族を連れて流浪の人となった。その旅はドングリや山芋などで飢えをしのぐ過酷な旅であったと言われている。

(ウィキペディア抜粋)